

カミーユ・ヴァローの地理学：覚書

野澤，秀樹
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/1936954>

出版情報：史淵. 131, pp.47-69, 1994-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

カミーユ・ヴァローの地理学

— 覚 書 —

野 澤 秀 樹

はじめに

日本の人文地理学がアカデミック世界の中で漸く軌道に乗り始めた頃、その成立に大きな貢献を果たした京都大学の小川琢治に「科学としての地理学」なる論考を起稿せしめたのは他にもない、当時出版間もないカミーユ・ヴァローの『地理科学』であった（小川，1926，1928）。小川がヴァローのこの書を取り上げたのは、この書によって、「我々の地理的現象の取扱方を如何にせば科学としての意義を完うし得るやの疑念を積み、……地理学の全部を一貫した研究の方針を立てる途が開けたと信じたからである」（小川，1926，8；1928，12）。小川が信じた方法とは「事物の真相を直視」するもので、観察者の眸中に入る範囲の景観を直観的に把握することから出発する「全景の直観」*tour d'horizon* と称せられるものである。この方法の詳細な検討は後に譲ろう。小川はヴァローの地理学方法論を的確に紹介している。

小川、石橋五郎の後、京都大学地理学教室を主宰することになる小牧実繁も上掲の小川論文と同年にヴァローの同書の歴史地理学の章を取り上げ、ヴァローの歴史地理学論を批判的に紹介しつつ、自身の歴史地理学の方法を確立していった¹⁾。このようにヴァローははやくからわが国の代表的地理学者によって紹介されていたのである。小川、小牧が取り上げたヴァローの『地理科学』はヴィダル以後、ブリューヌのものとともに地理学の本質論、方法論を展開したフランス地理学史上重要な書物であるが、フランスではフィリップ・アルボがヴァロー

の著書の概略を紹介しつつ、抽象的過ぎることを指摘したに過ぎない (Arbos, 1925)。フランスではかれの仕事については生存中も死後もほとんど顧みられることがなく、むしろ日本をはじめ諸外国でフランス地理学を代表する一人とみられてきた (Carre, 1973)。

なぜヴァロー (の地理学) はフランスで無視されて来たのであろうか。この経緯はブリューヌの場合とやや似た面がないわけではない。ヴァローはブリューヌの一年年下であるが、高等師範学校の同窓であり、後に『歴史の地理学』を共同執筆する間柄である。小川のようにヴァローをブリューヌ一派と見ることは間違いないであろうが (小川, 1926, 8; 1928, 12)、ブリューヌとヴァローの方法論は必ずしも同じではない。ただブリューヌと同様師ヴィダルの地理学に対しては批判的であったように思われる。批判的という言葉が強すぎるとすれば、少なくとも、ブリューヌもヴァローもヴィダルとは地理学の方法について考えを異にするところがあった。ブリューヌについてはすでに明らかにするところがあったが (野澤, 1990)、ヴァローの地理学を再検討することはフランス地理学派 (ヴィダリアン地理学) の全体像を解明しようとするわれわれの課題にとって不可欠の人物であると思われる。

I バス・ブルターニュの研究—地域研究のあり方

歴史学・地理学の高等教員資格試験 (アグレガシオン) に合格 (1894) 後、ブルターニュ半島モルビハンにあるリセ・ド・ポンティヴィ (高等学校) Lycée de Pontivy の教授に任命され、1896年にはリセ・ド・ブレスト Lycée de Brest に、さらに1901年には海軍学校 Ecole Navale に移り、1913年までそこで地理学を講じていた (Le Gallo, 1980)。このブルターニュへの赴任と滞在がヴァローの地理学研究を方向づけることになった。一つはかれの学位請求論文となるバス・ブルターニュの地域研究であり、他の一つは海に関する社会地理学・政治地理学の研究である。海に関してはヴァローはフランスにおける海洋学 Océanographie の開祖とされ、大著『海の一般地理学』を著わしている (Vallaux, 1933)。ヴァローはフランス以外では北西ヨーロッパを専門

地域としたが、それは海軍学校の練習船に乗って巡航したことが切っ掛けとなっている (Carre, 1973)。小川琢治が共感し、「全景の直観」の例として訳出、紹介されている景観は、ヴァローの住まいのあったプレストの海岸の急崖上のルレック・ケールオン Relecq Kerhuon からの描写であった。後パリのリセに転任してからも、しばしばブルターニュに滞在し、かれの作品の大部分はここケールオンで書かれたといわれる (Carre, 1973, 2)。

1907年に出版された学位論文『バス・ブルターニュ—人文地理学的研究』は一見すると、ドゥマンジョン (1905) やブランシャール (1906) らのヴィダルの指導下で書かれた地域研究に属するもののように見える。しかし詳しく内容に目を通すと、これらの地域研究やその後に見れる地域モノグラフィとは幾分異にしていることがわかる。ヴァローの研究はドゥマンジョンやブランシャールのように人間と自然の関係を徹底的に記述しようとしたものではない。マルトヌがヴァローの学位論文について、自然の部分が少な過ぎると批判しているが、ヴァローは始めからその予定であったと思われる。バス・ブルターニュの地域研究において自然地理学の分野があまり重視されていないことは、ヴァローが自然地理学を軽視しているからではなく、²⁾ ヴァローが他のヴィダリアンのようにあらゆる人間と自然の関係を網羅的に取り上げる総合的地誌を目指したのではないことによる。ヴァローは地理学の対象を自然と人間の接触する地表面においてはいるが、後の地理学方法論の検討において明らかになるように、自然地理学と人文地理学を性格の違うものとして明瞭に分けて考えており、『バス・ブルターニュ』の地域研究はサブタイトルが示すようにバス・ブルターニュ地方の人文地理を研究したものである。かれは導入部で自然地理の概略を述べた後、第1章で過去の遺産としての習俗・信念・言語を取り上げる。こうした問題を取り上げること自体当時の地域研究においては特異であるが、この点に関してかれは次ぎのような考えを表明している。人間集団の生活は自然的諸条件を反映するであろうが、「われわれは人間労働によって、人間そのものを知るのである。習俗とか信念、言語といったものはその結果でしかなく、原因ではない。それなのになぜこういったものを第一にとりあげるのか」

(Vallaux, 1907, 61)。ヴァローによれば、「それは言語・習俗・信念といったものが土地に根を下ろしているなら、それらはまた歴史的根——部分的には移植された——をもっているということである。だから完璧をきすためには土地に帰属しているもの、歴史に属しているものを研究の出発点にすべきである」(Ibid, 62) というのである。ヴァローは多くのヴィダリアンのように自然と人間の関係の調和を求めるといふよりは人間の移動性、人間労働をより重視し、「人間による景観の変化、自然地域を人間地域化すること」(Buttimer, 1971, 78) により強い関心を示したのである。この立場はブリューヌと共通するところのものであった。このような視点に立って、ヴァローはバス・ブルターニュにおける社会・経済的次元の問題を考察して行くのである。土地所有と経営、村落や居住形態、土地労働、野菜栽培、工業、漁業、人口問題と人口移動、都市や商業活動等がそれである。これらさまざまな地域を特色づける社会・経済活動を取り上げながら、「地理的地域のコントラスト」(Martonne, 1907, 362) を明確にしようとした。この学位論文を書評したマルトンヌは土地所有の研究など目新しいものとして評価しているが、問題をもっと直接に地理的事実に結びつけるべきだと注文を出している (Martonne, 1907, 364)。地理的事実とは自然地理的事実のことであろう。上述したように、ヴァローは「地域的総合」に向かうよりも「系統的アプローチ」の方向に進んだのである (Buttimer, 1971, 78)。この傾向はヴァローがブリューヌとともに人文地理学を初めて体系づけたラッツェルを深く研究していることによるのであろう。ヴァローのラッツェル地理学の検討結果が海、土地と国家を題材にした社会地理学の研究である。

II 社会地理学—海、土地と国家

ヴァローはラッツェルの『人類地理学』、とりわけ『政治地理学』を検討し、ラッツェルのジャーナリスト的な要素を取り除きながら、再構成したものが『社会地理学—海』(Vallaux, 1908) と『社会地理学—土地と国家』(Vallaux, 1911) の姉妹編 2 冊である。このような一般あるいは系統地理学

的書物はフランスではブリューヌのものを除いてきわめて少ない時代であり、小冊子ながら貴重な存在であった。しかしヴィダリアンに代表されるフランスの地理学界ではほとんど無視されたような状態であつたらしい。ヴィダルやその弟子たちはまだそのような書物は時期尚早としていたのであろう。また両書が『科学百科』叢書の「社会学」のシリーズとして出されたことも影響したのかも知れない³⁾1970年代以降社会地理学が問題にされるようになり、ブリューヌやヴァローの著書が注目されるようになった。

1) 社会地理学—海

ラッツェルは『人類地理学』において、人間はまずもって〈地的なもの〉としているが、海を生活の舞台としている人間も数限りない。ヴァローはそこに関心を向ける。かれは「人間の集合生活の海への適応という主題で、ラッツェルが『人類地理学』や、とりわけ『政治地理学』において示した観点を再考」(Vallaux, 1908, 1)しようとしたのである。ヴァローは人間の社会生活と海洋との関係を次ぎの4つのテーマにまとめている。まず第1は海に生きる人々の植民すなわちエクメーネ、いわば海の人間の問題、次ぎはそれら人々の移動の問題、第3が海を舞台にした交通、商業活動、第4が海の支配、政治地理学の問題である。以上のようなテーマを見ると海洋部、海岸部を含めて人文地理学全般を内容としたものであり、その視点は著者自身いうようにラッツェルのものである(空間、位置、運動)。ところでヴァローがわざわざ社会地理学と名づけた意味はどこにあるのだろうか。本文中には社会組織、共同体、社会的事実、人間集団、社会的観点、社会集団、社会類型など社会的 social あるいは社会的なものの内容を含む形容詞は繁出するが、海の地理的現象として social のもつ意味内容が立入って言及されているわけではない。確かに海岸部の居住形態について季節的な集中・分散形態をとるエスキモーの例(モースの研究の紹介)や遠洋漁業、沿岸漁業での漁業形態の違いが、異なった社会類型を形成するといったやや social な内容を示しているが、多くは social のことばが出るだけに終わっている。表題だけでなく本文中にも社会地理学の表

現を見出しうるが (Ibid., 340)、その意味を解することはできない。むしろ社会地理学の定義はどこにも示されていない。

後にブリューヌと共同で著わした『歴史の地理学』(Brunhes et Vallaux, 1921)の前半部は社会地理学が扱われている。ここでも社会地理学そのものの定義を見出すことはできないが、ブリューヌは人文地理学的事実の分類にあたって、地表において集団として生活している人間存在に係わる事実、たとえば交換、所有などの社会的事実を扱うものを「社会地理学」とよんでいる(野澤, 1990)。またヴァローとの共著において社会地理学はローカルな多様性からは独立したところで結論を見出すとし、社会地理学が一般地理学的な方向にあることを述べている。上述のヴァローの社会地理学もこのような意味で解すればよいのであろう。

2) 社会地理学—土地と国家

社会地理学の姉妹編『土地と国家』は表題から察せられるように、ラッツェルの『政治地理学』(Ratzel, 1897)と同じテーマを取り上げている。しかしヴァローは「たとえラッツェルの『政治地理学』と同じテーマを縮小したかたちで取り扱っているとしても、方法とインスピレーションにおいて全く異なっている」(Vallaux, 1911, 1)と序言の冒頭で断っている。そして「政治地理学をジャーナリズムから切り離し、力の及ぶ限り真の科学をつくるために、ラッツェルのそれを発展させようと言うのではなく、別のかたちでなそうと試みた」とその意気込みをかたっている (Ibid., 1)。

まずヴァローは政治地理学の方法をどのように考えていたであろうか。ヴァローはラッツェルの自然科学者的な観点とは異なって、「政治的社会は動物のコロニーのように地理的に規定されるようなことはなく、活動的適応能力があると言うことを前提とせねばならない」(Ibid., 19)とし、ラッツェル政治地理学にみられた生物学的方法を排除する。なぜなら生物学は珊瑚、海狸、蜂蜜のように環境への受動的適応を研究するに過ぎないのに対して、政治地理学は活動的な適応を研究するからである。こうしてヴァローは自然決定論を除けて

いく。

次にヴァローはどのような方法を主張するのであろうか。ヴァローによれば政治地理学の方法は2つの論理的手続きを含むという。それらの2つは互いに関連しており、抽象化の程度に違いがあるだけで、抽象化の低い段階を「アナロジー」とよび、高い方を「類型」と名づけている (Ibid., 24)。「アナロジー」とは最小不同な事実をつき合わせることであるが、その方法が正当化されるためにはアナロジーが要約されている基本的指標が注意深く分析されねばならないという (Ibid., 27)。アナロジーの使用によって類型の決定が行われるが、それはいくつかの国家を互いにつき合わせることによって、それらの間に自然的あるいは人間的秩序の基本的一致が存在すれば、グループの特徴の意味 *intelligence* を見出し得るということである (Ibid., 34)。ここでヴァローは政治地理学の方法として類型化、あるいは比較法を説いているわけである。この方法は当時のヴィダリアンの地理学には見られず、社会学において普遍的に用いられていたものである。地理学では唯一ブリューヌだけがその方法を説いていた (野澤, 1990)。

さきに述べたような視点からみて、政治地理学において自然地理的条件の作用は否定的に取り上げられ得るにすぎないであろう。確かに国家が気候、地形と言った個々の自然的条件から生じてくるものでないことは確かである。そのことは正しいとしても、それではこのような個々の条件を超えた一般的な環境条件に従っていると考えることはできないであろうか (Vallaux, 1911, 144)。ヴァローによれば、ラッツェルはそのように考え、国家研究における次ぎの2つの概念 *notion* を提示し、問題解決が可能であると信じたという (Ibid., 144)。その2つの概念とはラッツェル地理学の基本概念としてよく知られた「空間 *Raum*」と「位置 *Lage*」である。「ラッツェルにとってこれらの概念はただ単に記述の枠組みとして価値があるだけでなく、国家の地理学的説明の原理として価値がある」(Ibid., 145) のである。しかるにヴァローはラッツェルの「空間」概念に批判的である。なぜならラッツェルのそれが「空間そのもの (即自空間) *l'espace en soi*」を問題にしており、国家が占拠している空間

や自然的特徴、そしてそれらの間の関係、さらに、空間とそこに占拠している人間の数量や種々の具体的関係を断ち切った、いわば一種の形而上学的観念であるという点にある (Ibid., 146)。ここにラッツェルの概念が問題となる理由があるが、しかしヴァローは研究が観察に基づいている限り、一般化を放棄しないことが大切であるとし (Ibid., 146)、ラッツェルの抽象化、一般化の方向を否定しきってしまうわけではない。ヴァローは経験的事実に基づくことを、第一に重視しつつ、一般化の方向を目指していた。

しかしヴァローがラッツェルの「空間概念」に批判的なのは上の理由だけではない。それ以上に問題となるのは、ラッツェルの考えが拡張と征服を渴望するドイツ帝国主義のための科学的隠れ蓑になっていることにある。それはポレミックな問題であり、ジャーナリズムの題材に過ぎないのだが、真の科学にとって、ラッツェル地理学の大きなマイナスイメージであることをヴァローは指摘するのである (Ibid., 163)。

もう一方の概念である「位置」について、ヴァローはそれが現実に近いものを多く持っているので、さきの空間概念よりはましであり、空間概念を補正するものであるという (Ibid., 166)。しかしヴァローはここでラッツェルの位置概念に重要な補完を行い、位置概念に「分化」*différentiation* の概念を付加する。そのことはラッツェルにおいても繰返し暗示されていたが、「空間」と「位置」の概念の陰に隠れたままになっているといわれる。

ヴァローによれば政治地理学にとって基本である「分化」の概念は非常に多様で、複雑な現象を包括しているが、大きく2つに分けられるという (Ibid., 179)。第1は同一の基準によって集められ、比較され、活動と強度の程度によってまとめられる自然的あるいは人間的事実。第2は異なった秩序の下にある自然あるいは人間の諸特徴の、ある決まった地方あるいは地域における蓄積に由来する分化の事実。前者の分類は隣接性 *contiguité* の類型 *classe* であり、後者は重合性 *superposition* のそれである (Ibid., 179)。こうした概念を駆使して地域の分化を捉えていくわけであるが、ヴァローによれば地域相互に存在する差異 *différence* は各地域の位置に由来するのであって、土地や気候の

性質から来るのではない。それら後者は多様性の要素であって、対照（コントラスト）の要素ではないという（Ibid., 233）。

こうしてヴァローは結論において、国家の地理学の基本概念として、絶えず拡大して止まない分化の概念を設定した。「それは政治的社会的土地への従属を少しも否定するものではなく、受動的適応、自然的決定論と並んで、能動的適応、社会決定論の正当な役割を認めるものである」（Ibid., 398）。

Ⅲ ヴァローの地理学本質論・方法論

ヴァローの『地理科学』は、かれの哲学、科学観にもとづいて科学としての地理学が持つ特性、その方法を示した、地理哲学、方法論の書である。こうした書物の出現は隣国ドイツにおいては決して珍しいことではないが、フランスにおいては極めて稀なことである。フランス学派の創設者ヴィダルには地理学の本質や方法を取り扱った多くの論文があるが（野澤，1988）、ヴァローがいうように「ヴィダルは自分の思想を明確にしようとはしなかった」のである。ヴァローはそれを明確にしようとした。しかしそれはただヴィダルの考えを明確にしようとしただけではない。よく読んで見ると、多くの点で師ヴィダルとの違いが浮き上がって来る。

1) 科学としての地理学の条件

ヴァローの哲学・科学観がメイエルソンに依拠するものであることは、本文中の度々の引用によって知ることができる。⁴⁾

地理学はそれ自身の方法をもつ「独立した科学」としてのみならず、他の領域と係わり、従属的、二次的であるが、他の自然・社会諸科学に寄与する「補助科学」としても存在する。そのことがこの書が複数形で書かれた理由である。そうして本書は大きく二部に構成されている。第1部において「自律的科学としての地理学が科学の名に値する哲学を持っているだけでなく、それ自体“人間の世界の哲学”である」（Vallaux, 1925, VIII）ことが主張される。ここでは当然のことながら第1部を中心に検討される。

地理学は長い間実際に役立つ実用的な地理学として存在し続け、科学として見做されるようになった（制度化された）のは極めて新しい。そこにおいて「地理学は人間が生きて行くために必要とされる自然との関係において、人間集団の地球上での拡大、そして地表面に加える変化などを取り上げるので、この地理学は人文地理学と呼ばれ、社会科学の一部をなすことになる」（Ibid., 4）。ヴァローは上にも触れたように地理学を自然地理学と人文地理学とに分け、両者は科学方法論上性格の異なったものと考えている。その点は本書で一層明確に現れる。しかしながらヴァローは地理学の二元性（自然地理学と人文地理学、一般地理学と地域地理学）を「説明」と言う点で認めるのである。なぜなら自然的あるいは人間的な地理的現象はそれが展開する地表面の場所が説明の必然的要素となるからである（Ibid., 5）。これは地表面を「諸現象の繋がり」の場とし、そこに説明の原理を見出したヴィダルと同じ視点であろう。ただヴィダルは地理学をヴァローのように二元的なものとは見ようとしなかった。

ヴァローは以上簡単に見てきたことから明らかなように「説明」を科学の一つの根拠としていることが分かる。すでに上で取り上げた著書（『社会地理学—土地と国家』）において、「個々の事実を集めたものは……知識にすぎず科学ではない」（Vallaux, 1911, 21）と述べ、「説明」に至らねばならないことを主張しているが、その方法として上げられていた「アナロジー」法は本書において、それは説明ではなく、将来説明に至る一段階であるとされている（Vallaux, 1925, 18）。かつて地理学者は地図製作者と見られた時もあったが、地図製作は測地学者その他の専門家の手に渡り、現実を正確に表象（再現）するものと考えられた地図から、次第に科学的地理学は外的世界に直接接触することによって、対象を直接知覚しようとする傾向にあるという（Ibid., 24）。そして今日地理学は景観の解釈と説明を問題としており、地理的景観がますます科学の重要な部分を構成しているとされる（Ibid., 26）。景観については後に再び取り上げることにしよう。

2) 地理学の性格

a) 地表有機体について

「一世紀以来地理学の観察与件、事実および集団は、一般的視点によって秩序づけられるという際立った傾向を持っていた。それは地表面を広大な有機体と同一視するもので、その部分は相互依存関係、相互反応関係状態にあると見る考えである」(Ibid., 29)。これは師ヴィダルの地理学が依っていた基本的考えであり、ヴィダルの地理学がこの観念によって構成されていたことは前著で詳述したところである。

ところでヴァローによれば、地表有機体の考えはひとつの仮説に過ぎないという (Ibid., 44)。確かに地表有機体の観念は仮説であったが、少なくともある期間、たとえばヴィダルにみられるように研究を推進させる働きを果してきたことは事実である。しかしヴァローによれば、この地表有機体の観念は、意識的にしろ、無意識的にしろ目的論と結びついていたとされる (Ibid., 49)。たとえある期間有効な働きをしたからと言って、将来にわたって指導的な理念となることはできないであろうとして、地球有機体論を除ける (Ibid., 49)。従って「地理的個体」説にも批判的であることは言うまでもない (Ibid., 50)。このようにヴァローは地球有機体の理念を受け入れないが、それに代わってかれは「あらゆる部分を結びつけている相互依存関係」という今日のシステムに近い考えを提示している。しかしこの考えも先行者がこれまでも行ってきたような地図表現的図式主義による過度の分析傾向に陥らないよう注意を促している。こうして地理学は記述段階から総合的形態および方法へ向けて科学として出発することになる (Ibid., 58)。

b) 総体 (masse)、全体 (molaire) の科学としての地理学

ヴィダルの定義以来、フランス地理学では地表の諸現象は相互に切り離せないものと認められてきたが、ヴァローによればこの観点は記述という科学的手続きを確信する場合にのみ有効であるという。そのことによって「地理学は記述段階から総体、全体の科学として、さらに集合体 (groupement) の科学と

して現れる」のである (Ibid., 59)。こゝに地理学の特異性があり、ヴァローは地理学と他の観察諸科学では通常の論理手続きが全く異なっていることを指摘する。自然あるいは社会諸科学のグループに属する一地理学もこの二つの科学に属しているわけであるが一あらゆる観察諸科学は、直接観察によるにしろ、道具を使って観察するにしろ、まず現実を次第に細かく断片化していき、ついで合理的説明を狙いとする総合によってそれを再構成する。ところがそれに対して、地理学ではまず最初に総合があり、しかもそれは純粋な記述を専ら狙いとしたものである (Ibid., 60) という。自然科学が超微細なものを分析してくのに対して、社会諸科学でもまた別の大きさにおいてであれ、かれらにとって無限に単純な、あるいはそのように想像されるもの、たとえば未開人、未開社会、部族、村落、あるいはもっとも単純な社会職業類型といったようなものによって研究をはじめ。そのようにして大きな成功を収めてきたのである。したがって分析的な科学 (ヴァローは *moléculaire* な科学とっている) に慣れ従ってきたものにとって、集合体を把握する地理学的方法は結合関係を把握するためには全く無駄な試みであり、せいぜい詩的あるいは形而上学的想像力の高揚に過ぎないと思われるであろうという (Ibid., 61)。ヴァローはここで科学を総体的、全体的な、すなわち *molaire* 科学と要素的、分析的な *moléculaire* 科学に二分し、これらを対照しながら、前者に属する地理学の性格を浮かび上がらせようとする。

ヴァローは地理学的な集合体の観察が有効であるためには、他の諸科学から借用した多様な要素的、分析的観察の基体 *substratum* に基づかなければならないとし (Ibid., 65)、地理科学と分析的な諸科学との緊密な関係によって科学としての地理学はが成り立つことを指摘している。そして地理学が他科学から借用するのは専ら記述において、また記述のためであることを強調している (Ibid., 66)。なぜなら地理学は説明の観点において、他の諸科学の領域を蚕食しようとするものではなく (Ibid., 66)、他の諸科学に何ら依らない地理学に独自の説明手続きを有しているし、また有していなければならないからであるという。「真の科学とは説明の中に、あるいは説明に向かう努力の中にある」

(Ibid., 66) から、説明において他の諸科学から借用するようでは独自の科学の成立を云々し得ないとされる。しからば地理学の独自の説明とはどこにあるのだろうか。その前にヴァローは地理的事実のもつ総体性、全体性から、以下のような特徴を指摘するのである。

ヴァローによれば、地理学における集合の手続は「分類の大枠」を伴っていないなければならない。それがなければ、地理学の方法は無意味とされる (Ibid., 73)。集合することと分類 *classement* することは互いに相反する関係にある。それらは地理学の方法が記述的手続きに課する二重の作業であるが、同時に成り立たせることは難しく、これまで地理学的記述が不十分であった理由はそこにある。ヴァローは地理学的記述が集合体の総合 *synthèse de groupement* に基づいていること、そしてその総合が、他の諸科学によって得られた分析的事実の全体であり、また地理的で、分析的性格をもつ「分類の大枠」との間に枠付けられたものであることを主張することによって集合と分析の妥協を図ろうとする。後者の分類の分析的な性格は、要素的、分析的科学が行なう分析とは全く異なったもので、単純な事実に基づくのではなくて、いわばそれだけでそれぞれ小さな世界を作っているような非常に複雑な事実に基づいているものである (Ibid., 76)。「分類の大枠」の分析対象を複雑 *complex* な事実におくことに不明確さが残るものの、ヴァローの考え方によれば、地理学はその記述の基礎に分析的科学による多くの事実を有しており、それによって集合体の記述的综合はより強固となり、それに従っている分類もまたより一層強固であると主張されるのである (Ibid., 77)。

このようにしてヴァローは地理学自体がもつ2つの哲学的特徴を指摘する。すなわち、第1はかれが力動性 *dynamisme* と名づけるもので、地的なコスモスの中において認められるさまざまな力の交錯であり、第2は機械的原子論 *atomisme mécanique* と呼ぶものである。それは現実をあらゆる小さな交換可能な断片に細分し、ついで再びより大きな広がりでの自己同一性を持つように調整し、われわれのコスモスの総体に近づこうとするものである (Ibid., 79)。

このヴァローのいう地理学が有する2つの見方は、実は前者ディナミズムの

特徴はかれのいう *molaire* な科学—すなわち地理学はこれに属する—のそれであり、後者原子論は *moléculaire* な科学の持つ特徴である。ヴァローは地理学を前者の特徴をもつ科学としているのであるが、上述のように分析的、要素的な科学にも大きく依存している。そのことからこの両性質を合せ持つことを地理学の特徴としているのであろう。

この辺りのヴァローの議論は筆者の理解の不充分な点もあるが、あまり明快であるとはいえない。地理学は集合体、全体の科学の特性を有するわけであるが、集合体、全体の観察が有効であるためには分析、要素科学の事実が必要であること、しかもその分析、要素科学からの借用は記述レベルに限られることがまず確認される。次いで地理学が独立した科学として必要とされる地理学独自の説明に、ヴァローは地理学が全体的、集合体的科学でありながら分析的、要素的な性格を持っていると主張し、地理学が単に記述的科学に止まるのではなく説明的な科学に至る途を分析的、要素的な科学の性質に求めようとするのであろう。

3) 地理学の方法

以上のように地理学のもつ性格が特徴づけられている。つぎにヴァローは観察に基づく地理学の記述の枠組みに関して、つぎのような2つの大きな枠組みを考えている。「全景直観法 *tour d'horizons*」と「総体的事実 *faits de masse*」の2つがそれである。

a) 「全景直観法」

目の高さによって地表面の広がり大きさがことなることは体験的にもよく知られた事実である。次第に高度を上げ、実際の視覚的観察では不可能な高度に達したとしよう。視覚的には観察できないがわれわれは地図的表現の助けによって、理想的な視覚領域を持つことができる。近代科学は直接対象に向かう傾向にあるが、地理学の「全景直観法」は現実の視覚よりもより地図による理想的な視覚に依存してきたという (Ibid., 81)。ヴァローは地図が現実を正確に表現しないことから、あまり地図に依存することには批判的である。

「総体的事実」とは集団によって捉えられるような観察事実とは異なって、人口や経済統計で表わされるようなもので、上述の視覚的事実とともに地理学の集合体の記述的総合において重要な地理的資料である。したがってこの2つの枠組みは上述の科学の2つの性質、集散的・全体的 *molaire* な科学と分析的・要素的 *moléculaire* な科学に対応するものであることは言を俟ない。

ヴァローのいう地理学の以上のような諸特徴から、「全景直観法」による景観描写が地理学の方法として浮かび上がって来る。上述のように小川が高く評価したところのものである。「景観」については今日再び注目されているところであり、その参考に供するためヴァローの議論を簡単に紹介しておこう。

絵画において風景がその位置をしめるようになるのはあまり正確ではないが、自然感情と言った一般的な感情が開花した後ことであり、この自然感情はフランスではルソーやシャトーブリアンとともに花開いたのであるが、それはまたフンボルトにおいてみるように近代地理学の形成に導く源泉ともなったのである (Ibid., 95)。ところでヴァローによれば、絵画における風景の表現方法とか、対象そのものと地理学におけるそれとは大きく異なっており、混同してはならぬという。つまり画家は風景を描くことによって、その外的世界を理解するとか理解させるとか言ったことを求めてはいない。だから風景画は(ただ単に新しい手段によって)美的な印象や感動を生みだそうとしたにすぎない。

風景はまた文学においても問題となるが、世界の魂をわれわれの魂に結びつけようとする真に文学的な景観は地理学の方法にとっては無縁であるとする。ヴァローは絵画、とりわけ文学における人間中心的な視点とは一線を画そうとするのであろう。この辺は今日のヒューマニスティックな地理学者の「景観論」⁵⁾とも異なるところであろう。しかしヴァロー自身もいうように地理的視覚も、はじめは身近なところから出発する点で人間中心的であらざるを得ないが、しかし地理的風景の論理的記述は、地理学によって考察される景観が「背景的景観 *paysage d'encadrement*」であるように、中心から周辺にではなくて、周辺から中心へと進められる (Ibid., 100)。また地理的景観はただ単に「背景的景観」であるだけでなく、また「運動景観 *paysage nématique*」でもなけ

ればならないという (Ibid., 112)。つまり景観は固定したものではなく、常に運動しているのである。それを捉えねばならないという。

b) 「総体的事実」について

さきに地理的事実の特色として「総体的事実」が指摘されたが、そこからくる地理学的方法的特徴を見ておこう。地理的事実における集合体的、全体的性格から「全景直観法 *tour d'horizons*」が提唱されたが、「全景直観法」はとりわけ人文地理学において不十分な点がある。というのはヴァローによれば、それは外側からものを記述するに過ぎないからといわれる。そこでかれはグローバルな視覚のもとに落ちこぼれてしまわない、人間そのものに関係したような事実の空間的な結合関係、たとえば個人個人の分散や流動、集団を構成する特徴や集団を相互に差異づける特徴などを問題にすべきことを主張する。こうした「総体的事実」は「全景的直観法」の場合以上にずっとデリケートで複雑な、しかしまた一層有意義な結合関係を地理学に齎らすのであるが、それらは「総体的事実」として、直接的知覚からは切り離されている。しかしこのような事実は同一の、簡単に言えば比較し得る性質をもった原子、分子的な事実で、数的表現を与えることができるものである。このことから地理学の中に多様な統計が入り込んで来ることになる (Ibid., 148)。地理学と統計に関して、フランスではジャン・ブリュヌが論及しているが (野澤, 1990)、ヴァローも同一の議論を行なっている。ブリュヌは地理学的事実がもつ統計係数的性質と地理学の確率論的性格を指摘したが、ヴァローは集合体の記述的総合を打ち立てるに当たって「概数 *ordre de grandeur*」の概念—これこそ「総体的事実」の数量的、統計的性質—を導入することの重要性を指摘している (Vallaux, 1925, 161)。「総体的事実」は「全景直観法」の視角では逃れてしまう事実であるが、将來說明の必要な要素として「全景直観法」の中に統合されるのが望ましいという (Ibid., 176)。

c) 地域の総合、景観変化

地域において地理学の総合 (地理学二元論の克服) を試みるのがヴィダル派地理学の特徴であるが、それは様々な事実 (集团的、集合的等) を地域の記述

の総合において統合することであり、ヴァローはそれを「地域的集合体」と呼んだ。しかしヴァローによると自然地域と人文地域は一致しないし、「地域的集合体」による記述的総合も自然地理学と人文地理学は離散化の傾向にあるし、地域地理学と一般地理学のあいだにも統一や連続性はなく、断絶しかないという (Ibid., 173)。とくにヴィダルが強調したところの地域地理学は偶然に委ねられ、合理的説明に至る希望を失っているとされる。このようなことからヴァローは、地域という枠組みはどのようにしても二つの地理学を統一化することはできないと断言する (Ibid., 173)。これは明らかなヴィダル地理学批判と言ってよいだろう。それならばヴァローはどこに人文地理的事実の統一を求めるのだろうか。

ヴァローは人文地理学の実事統一され、また分節化されるのは自然景観の変形においてであるという (Ibid., 196)。地表上のものや生物との関係において人間活動の目に見え、かつ恒久的な痕跡を確認する場合に、われわれは地理学の分野にいるということができ、そうでない場合は地理学の領域から外れているということになる (Ibid., 196)。ところで自然景観の変形、変貌とはヴィダルの地理学では「生活様式」の概念で捉えることが可能であろう。ヴァローによると、後者の概念において質的な意味表現は十分要約されているが、なお不明確なところがあるという。そこでかれは「生活様式」に代えて「労働指標 indices de travail」あるいは「専門的職業能力 aptitudes professionnelles」によって置き換える方が適当ではないかと提案している (Ibid., 203)。その根拠は「労働指標」によって人間集団の合理的分類をする場合に量的表現で補うことができるというものである (Ibid., 203)。そしてヴァローは人間集団による景観の形成、変化を「素材の第4状態 le quatrième état de la matière」と名づけた。これは上の人文地理学の課題、自然景観の変貌のことを指している。

ヴァローの『地理科学』の第2部は地理学以外の他の科学に対して、地理学が補助科学としての役割を果たす場合について検討している。人文地理学に関するものとしては「歴史学」および「社会学」が取り上げられている。「歴史

学」については上で述べたように、小牧が「ヴァロー氏の歴史地理論」として詳細に紹介したところのもので、小牧はヴァローのように歴史地理学を補助科学とすることに反対であるが、自らの歴史地理学の方法としたものである。その要点は歴史地理学を過去の地理学（時の断面説）、過去の地理の復原に求めるものである。

「社会学的地理学」については前世紀末から今世紀初頭にかけて展開されたデュルケーム学派との論争の問題が取り上げられている。ヴァローの本書が出る3年前リュシアン・フェーヴルがその問題を取り上げていたが、ヴァローの方が明快のように見える。ヴァローによると、デュルケームは社会形態学よりも社会生理学を強調していたのであり、社会現象の原因については社会に内的であるものに求めていたという。したがって社会形態学は地理学に任せていたということである⁶⁾。なおヴァローは社会学と地理学との相違について、社会学は人間中心的な学問であるのに対して、地理学はものの科学であることを強調する。これはヴィダルの地理学の定義のように、地理学が人間そのものを研究対象にするものではないことを示そうとするものであるが、ヴィダルの場所の科学とも一線を画している。しかしつぎの文章はヴィダルの観点とは隔たるものではない。「地理学が位置づけられるのは、ものの観点であって人間の観点ではない。集落、職業、人間集団の密度、国家の区分のような社会的事実が地理学的総合の枠組みの中に指示される時、地理学はそれらを精神的な相互作用、共同、あるいは闘争の要素としてみなすのではなく、地表面を変化させ、また「素材の第4状態」を生じさせ、発展させる事実としてみなすのである」(Ibid., 396)。いずれにしてもヴィダルもヴァローも地理学が歴史学や社会学とは見方が異なっていることを主張しようとしたのである。

おわりに

前世紀末から今世紀初めにかけてヴィダルは多くの弟子たち（ヴィダリアン）を育てた。かれらの大半は師の地理学の方法に忠実に従い、それに対して反省、批判を加えることはなかった。そうした中であってヴァローはブリューヌとと

もに地理学の本質論、方法論を思索したフランスでは希有の学者に属する。それは当然ヴィダルを批判的に検討することから出発ざるをえなかったであろう。ヴァローがヴィダルの考え、概念を受入れているところは多い。ヴァローは地理学の対象を地表における三体の接触面におき、その集合的、全体的性質を指摘したヴィダルの考えを踏襲している。ヴィダルにとって地表面のもつこの性格は地球有機体（「地的統一」）の観念を前提にして成り立っているものであった。しかるにヴァローは地的有機体の観念のもつ目的論的性格を喝破し、仮説としてのみそれを承知するに過ぎない。ヴァローはそれに代わって「相互依存関係」という今日の「システム」に近い考えを導入している。⁷⁾

ヴァローは人文地理的事実の統一化、分節化を自然景観の変化においたが、これはヴィダルの主張と言ってよいだろう。しかしヴィダルの場合、これを自然と人間との調和的な関係に求め、「地域的総合」を最終目標としたが、ヴァローは自然地域と人文地域の不一致、自然地理学と人文地理学の離散化を主張し、ヴィダル地理学の真髄であった「地域的総合」には批判的であった。それではヴァローの地理学観の特徴はどこにあったのだろうか。

かれは「科学としての地理学」の樹立に向けて苦悶を続けた。ヴァローにとって個々の事実を集めただけでは知識に過ぎず科学とは言えない。科学とは「説明」があってはじめてそれと認められる。ヴィダリアンにおいて「記述」に止まっていた地理学を如何に説明の科学に高めるか、それを求めて悪戦苦闘の記録がヴァローの『地理科学』とあってよいだろう。

ヴァローは科学を集合体的、全体的な現象を対象とする molaire な科学と対象を断片化し、分析する要素的な、moléculaire な科学に二分した。地理学は前者の系統に属するが、ヴァローによれば molaire な科学が有効であるためには moléculaire な科学の成果に抛らなければならないという。ここに地理学は集合体的、全体的科学でありながら、分析的、要素的な科学の性格を併せ持つことが主張されて来るのであるが、その両者の論理的な関係は必ずしも明瞭ではない。ヴァローは地理学の集合体的、全体的科学としての性格にその特色を認めるが、そこでは「記述」に止まらざるを得ない。「説明」に科学の

設立の根拠をおくヴァローは苦慮するのである。そこでかれは集合体的、全体的事実を記述する場合に、分析的、要素的科学によらざるを得ないとし、そこに地理学が moléculaire な科学としての性格をもつとするのである。

このように地理学の性格が規定された後、その方法として「全景直観法」による景観把握（描写）、それを補う「総体的事実」による概数的、統計的把握の方法が提起される。前者が集合体的、全体的事実（molaire 科学）に対応し、後者が分析的、要素的事実（moléculaire 科学）に対応するものであることはいうまでもない。

このようにヴァローの地理学本質論・方法論は二元的性格の統一として構成されている。この方法論がフランス地理学の中で一定の位置をしめているわけではなく、この考えは後ショレーの方法の中にみることができるという（Nicolas-Obadia, 1984）。さらにニコラはヴァローが地理学における主観・客観の認識論を問題にしているという。ヴァローは地理学の対象を客観的なものとして捉え、その説明として人間中心的であることを否定している。以上見る限り、ヴァローはヴィダル、ブリュヌとともに実証主義に止まっていたことは事実であろう。

《註》

- 1) その批判の仕方には問題があると思われる。ヴァローは歴史地理学を地理学が歴史に対に対して補助科学となることとしているのであるが、小牧はそのことに反対している。それならばヴァローの自立科学としての地理学の立場にたつて批判すべきであるが、小牧はそれをしていない。またヴァローは歴史地理学を論じようとしたのではないし、かれは歴史地理学者と見做すことはできない。したがって小牧のように「ヴァロー氏の歴史的地理学論」とされてはヴァロー氏が迷惑であろう。
- 2) 事実ヴァローの主著『海的一般地理学』は自然（地理）の分野が大部分を占めている。
- 3) 当時社会学のデュルケーム派との間は、まだ対立した状態にあったと思わ

れるが、ヴァローの二著は社会学者ガストン・リシャール監修のシリーズとして出されている。いずれにしてもブリューヌもヴァローも隣接科学にはつねに注意を向けていた。

- 4) この点について検討の必要があるが、既応の研究として Nicolas-Obadia (1983) がある。
- 5) 当時ドイツにおいて、地理学を芸術と同一化しようとする「新地理学運動」が起こっていた。ヴァローの書にそれに対する引用は見えないが、あるいはそれに対する意識が働いていたのかも知れない (山野, 1990)。
- 6) わたくしも数年前この論争を検討したことがあったが (野澤, 1980, 1988)、当時本書 - その存在は勿論承知していたが - を参照することがなかったが、わたくしと同じ考えであったことを知り、我が意を得たりと思ったものである
- 7) それが十分展開されているわけではないが、ニコラがヴァローの考えがショレーに継承されているというのはこの点をいっているのであろう。

文 献

- Arbos, Philippe 1925: Les sciences géographiques, *Annales de Géographie*, 34, 270-271.
- Buttimer, Anne 1971: *Society and Milieu in the French Geographical Tradition*, Rand Mac-Nally and Company, Chicago, 226 p.
- Brunhes, Jean et Vallaux, Camille 1921: *La Géographie de l'Histoire*, Alcan, Paris, 716 p.
- Carre, François 1973: Camille Vallaux (1870-1945), *Les Géographes*, Séries A, N°.1, Commission d'histoire de la pensée géographique. 8 p.
- Carre, François 1978: Camille Vallaux 1870-1945, *Geographers, Bibliographical Studies*, 2, 119-124.
- 小牧実繁 1926: ヴァロー氏の歴史地理学論、(上)、(下)、『歴史と地理』、18

(4)(5)、291-300、419-429.

Le Gallo, Yves 1980; Présentation, in Vallaux, Camille 1907, réédition en 1980.

Martonne, Emmanuel de 1907: La géographie économique de la Basse-Bretagne d'après M. Camille Vallaux, *Annales de Géographie*, 16, 361-364.

Meynier, André 1969: *Histoire de la pensée géographique en France*, P.U.F. 223 p.

Nicolas-Obadia, Georges 1983: *L'axiomatisation de la géographie: L'axiome chorologique*, Atelier national de reproduction des thèses, Université de Lille III, 559 p.

野澤秀樹 1988: 『ヴィダル・ド・ラブラーシュ研究』, 地人書房.

野澤秀樹 1990: ジャン・ブリーヌ地理学の方法, 『史淵』, 127, 29-66.

小川琢治 1926: 科学としての地理学 (上)、(下)、『地球』, 5(1)(2)、1-11、99-109. 『人文地理学研究』(1928) 所収、1-30.

Ratzel, Friedrich, 1897: *Politische Geographie*, Verlag Von R. Oldenbourg. 715 p.

Vallaux, Camille 1903: Sur les oscillations des côtes occidentales de Bretagnes, *Annales de Géographie*, 12, 19-30.

Vallaux, Camille 1905: L'évolution de la vie rurale en Basse-Bretagne, *Annales de Géographie*, 14, 36-51.

Vallaux, Camille 1907: *La Basse-Bretagne, étude de géographie humaine*, Cornely, Paris, 320 p. réédition en 1980, Slatkine.

Vallaux, Camille 1908: *Géographie sociale: la mer*, Encyclopédie scientifique, Doin, Paris, 377 p.

Vallaux, Camille 1909: Contribution à l'étude des fjords et des chenaux latéraux de Norvège, *Annales de Géographie*, 18, 205-226.

Vallaux, Camille 1911: *Géographie sociale: le sol et l'Etat*, Encyclopédie

- scientifique, Doin, Paris, 420 p.
- Vallaux, Camille 1923: La géographie humaine est-elle légitime et possible?, *La Géographie*, 39, 461-463.
- Vallaux, Camille 1924: The maritime and rural life of Norway, *Geographical Review*, 14, 505-518.
- Vallaux, Camille 1925: *Les sciences géographiques*, Alcan, Paris, 407 p.
- Vallaux, Camille 1927: Les méthodes d'observation en géographie, *Revue de métaphysique et de morale*, 34, 473-488.
- Vallaux, Camille 1928: Les aspirations régionalistes et la géographie, *Mercure de France*, I-VIII(205), 568-585.
- Vallaux, Camille 1930: Jean Brunhes, *La Géographie*, 54, 237-239.
- Vallaux, Camille 1933: *Géographie générale des mers*, Alcan, Paris, VII-796 p.
- Vallaux, Camille 1938: Deux précurseurs de la géographie humaine, Volney et Charles Darwin, *Revue de Synthèse*, 15, 81-93.
- Vallaux, Camille 1942: Recherches récentes sur la circulation superficielle et profonde de l'Atlantique Nord, *Annales de Géographie*, 51, 161-174.
- 山野正彦 1990: 景観の「相貌」と「ゲシュタルト」——1920・30年代ドイツにおける景観論の展開——『人文地理』, 42, 146-67。
- 〔付記〕本稿は、平成5年度科学研究費補助金（総合研究(A)）「社会理論と地理学——その思想的考察」（課題番号 05301091 代表者 野澤秀樹）の研究成果の一部である。